

## 子育て支援における地域組織化活動

— 関係づくりを視点とした「子育て講座」の実践をとおして —

杉野 聖子\*  
Seiko SUGINO

### <キーワード>

子育て支援, 地域組織化活動, 子育て講座, 育児講座, コミュニティワーカー

### <要 約>

近年、子育て支援において地域に期待される役割は大きく、2009年4月から「地域子育て支援拠点事業」は児童福祉法上の事業として位置付けられている。しかし、国の推進する施策は、つどいの広場事業を始めとした「場の提供」や講習などの「機会の提供」が中心で、地域を組織化する意義や方法についての示唆が弱い。社会的子育てを推進するには、参加者同士、参加者と地域支援者、地域資源との関係づくりを視点にした事業展開が必要であるし、その実現には専門職によるソーシャルワークの方法とスキルを必要とする。

東京都子ども家庭支援センターでは、問題を抱える子育て家庭へのケースワークを中心に子育て支援を展開しているが、同時に地域組織化活動をセンター事業に位置付けている。しかしながら、必ずしも専門技術を身につけたワーカーがその役割を担っているわけではない現実も散見する。そこで本稿では、事例をとおして地域組織化活動に必要なワーカーのスキルや視点について考察した。それは今日の地域の子育て支援を実のあるものにするための現実的な課題であると考えからである。事例としては、センター開設当初から地域組織化活動に力を入れ、子育て支援を展開してきた東京都国立市での取り組みを事例に取り上げる。中でも、関係づくりのきっかけとして実施されている「子育て講座」について、子ども家庭支援センターの地域活動ワーカーの実践記録を用い、場や機会の提供に終わらない地域組織化に向けての取り組みの必要性と課題について考察する。

## 1. 研究の目的

子育て支援には、今後さらに仕事、子育て、生活といった正に生活課題に即した形での展開が求められている<sup>1)</sup>。教えてもらわないと人間関係の作り方がわからないという世代が親になる時代を迎えている。多様な価値観、多様な人生の選択肢が増え選択の自由があたりまえになる現代で、逆に生活者としての国民に求められるのは情報収集力や自己決定力であり、そのための機動力である。地域力の低下が叫ばれて久しいが、日常生活を送る場としての地域社会で、負担感と孤立感を抱えながら「つながりたいけれども、どうつながってよいかわからない」まま育児を行っている人の存在は、次に子どもを産み育てる世代に更なる不安を与え、少子化をますます深刻化させる要因にもなっている。

筆者は、6年半東京都国立市の子ども家庭支援センターで地域活動ワーカーとして従事し、地域組織化活動を展開してきた。そこで出会ったのは、子育てに孤独な母親の声であったり、子どもを出産する前から、子育てによる孤立を恐れてつながりを探し続ける姿であったり、つながるきっかけを求めながら、自分に合ったつながり方を模索していた親子であった。このような親子にどのような機会を提供できるのか、本当につながりが必要な人にきっかけを届けることが最大の課題であった。またその過程において、つながった喜びの声、そしてそれゆえに起こる葛藤に苦しむ姿にも直面した。それらの実践から導き出されたことは、第一に生活の基盤となる地域社会において総合的な子育て支援体制づくりとサービスの提供、第二にそれらを自ら活用できるようなエンパワーメント、第三に、関係づくりを支援する視点、この三つの側面を担えるをもったソーシャルワークが必要であるということである。

本稿は、これらの問題意識をふまえ孤立化する母親や親子が、つながるきっかけを作る機会として提供される子育て講座に焦点をしばり、一連の先行研究とふまえつつ、地域組織化活動における子育て講座の意義と役割、地域活動ワーカーの果

たす役割を明らかにする。

## 2. 子育て支援における地域組織化活動

### (1) 地域組織化活動の子育て施策としての位置づけ

今日の子育て支援施策は1994年12月に策定されたエンゼルプラン（1995～1999年度）から始まり、新エンゼルプラン（2000～2004年度）へと少子化対策、特に保育施策を軸に進められてきた。つまり初期の子育て支援は、女性の社会進出を原因とみる少子化対策であり、その中心となっていたのは就労家庭に対するサービスであった。しかし、2000年以降は在宅家庭の子育て支援も視野に入れ、より包括的な支援が必要とされてきた。地域における子育て支援を推進すべく、全国各地に地域子育て支援センターが、行政機関や保育所、医療機関などに設置され、そこでは①育児不安等についての相談指導②子育てサークル等の育成・支援③特別保育事業等の積極的実施・普及促進の努力④ベビーシッターなど地域の保育資源の情報提供等⑤家庭的保育を行う者への支援が行われている<sup>2)</sup>。

近年、地域に期待される子育て支援に果たす役割は大きい。「つどいの広場」事業<sup>3)</sup>を中心に整備を進めてられてきた「地域子育て支援拠点事業」は全国で4891か所（2008年度）となり、同年11月の児童福祉法改正で、2009年4月から児童福祉法上の事業として位置付けられるとともに、市町村に対しその実施に努力義務が課されたところである。しかし、国が推進する地域における子育て支援施策には、「地域組織化活動」という用語は直接的には出てこない。地域子育て支援拠点事業は「場の提供」が中心であり、その事業内容は①交流の場の提供・交流促進②子育てに関する相談・援助③地域の子育て関連情報提供④子育て・子育て支援に関する講習等である。

東京都は国の法定化に先駆け子育て支援に取り組んできたが、1995年以降、これを独自施策として家庭児童相談室をセンター式に切り替え、子ども家庭支援センターの設置を行政区単位で進め、

2007年度に鳥しょ部を除く市区町村での設置を完了した。その役割と機能を示した『子ども家庭支援センターガイドライン』（以下、『ガイドライン』と略）の中で、子ども家庭支援センターの活動内容に①さまざまな相談への対応②在宅サービス等の提供③サービス調整④要保護児童対策地域協議会⑤地域組織化活動⑥広報活動⑦運営協議会を掲げている<sup>4)</sup>。この全112頁の『ガイドライン』は、市区町村の要保護児童への対処、ケースワークの方法、システムづくりで構成されている。そもそも子ども家庭支援センターに求められる機能が家庭児童相談室の持つ機能、つまり要保護児童対策が中心であるためマニュアル的要素が強い。

しかし、子育て支援という大きな視点に立てば、要保護児童を抱える家庭だけでなく、誰もがその予備軍となり得る地域の子育て家庭に対する問題発生の予防機能として、地域組織化も当然必要となる。このことについて『ガイドライン』では最後の第6章にわずか4頁ではあるが、「地域組織化活動」の意義や考え方、具体的活動内容5点、実際の展開事例を示している<sup>5)</sup>。これは、少なからず東京都が、子どもと家庭に関わる福祉の推進において、「地域組織化活動」が不可欠で困難を抱えた家庭も含む包括的な子育て支援を視野に入れている証左ともいえる。

## (2) 先行研究

地域における子育て支援の展開については、2000年代を中心として様々な研究がなされている。子育て支援領域において「地域組織化活動」の言葉をテーマに打ち出した山野(2002)<sup>6)</sup>は、ソーシャルワーカーによるコミュニティワークのモデルに沿った子育てネットワーク形成への実践過程を分析した。ここで山野は、コミュニティワークに関する視点の必要性、子育て支援におけるソーシャルワーカーの機能として、地域に働きかけ開発する機能と当事者である母親たちのエンパワーメントの促進を課題として指摘している。

また、平野(2008)は「子育て支援領域における『地域組織化活動』について—先行研究の解題と一考察—」で、子育て支援における地域組織化

活動に関する先行研究を分類し、内容の分析を試みている<sup>7)</sup>。分類対象とされた論文は33論文で、項目としては①地域組織化②子育て支援グループ③ボランティア④講座⑤子育て支援ネットワークセンターの機能や役割等に分類しさらに、主要な「児童福祉論」での取り扱いについても触れている。ここでは意義と連動したソーシャルワーク実践としての「地域組織化活動」の検証に取り組む研究の少なさから、「意義を考えないまま個々の事業がバラバラに展開するという事態を招きかねない。」<sup>8)</sup>と指摘している。さらに当事者による子育てグループへの支援方法、ボランティアの育成、ネットワーク形成について、当事者、支援者、機関を網羅した地域全体の組織化を意識した実践の研究不足、担い手となる専門職の資質の検討も挙げられ、子育て支援における地域組織化活動についての研究は、まだまだ課題を多く抱えていることを指摘している。

また、明治学院大学社会学部附属研究所のグループが2007年度のプロジェクト研究として「子ども家庭支援センターにおける地域組織化活動について：ボランティアとの協働に焦点化して」で、東京都における子ども家庭支援センターにおける地域組織化活動についてアンケートとヒヤリング調査を実施し、その実態と課題を明らかにしている<sup>9)</sup>。この調査は、2004年の児童福祉法改正以降、児童虐待通告の第一義的窓口として市町村が規定されてから、子ども家庭支援センターの機能としてますます強まった要保護児童対策業務に対して、現場における地域組織化活動業務の認識と展開を検証するという意味で大変興味深い。調査結果によると、「地域グループの組織化支援」について、既存のグループ支援は78.4%のセンターが取り組んでいるが、その実態は活動場所の提供、グループに関する広報活動、物品貸出しが中心であった。また、新たな子育てグループの組織化支援、子育てグループ以外の地域グループへの支援も含めて総合的な地域グループ支援を行っているセンターは8.6%に過ぎず、これらの支援を全く行っていないセンターが17.1%という結果であった。さらにこの調査では地域組織化活動の担い手である専

門職としての地域活動ワーカーを全く置いていないセンターが43.2%あることを指摘し、配置の必要性も示唆している。

子育て支援における地域組織化活動は、地域での子育て家庭の孤立を防ぎ、虐待予防の一面を持つ重要な活動である。福祉活動全般において地域組織化を推進してきた社会福祉協議会においても、この観点から全国社会福祉協議会の調査報告書が2010年3月に『市区町村社協における虐待予防のための地域子育て支援の展開』<sup>10)</sup>としてまとめられた。「虐待発生は特定の人が行う特別なことではなく、育児不安等を含めストレスとなる諸条件が重なる延長線上で発生することがわかってきている」<sup>11)</sup>なかで、子育て家庭の孤立化防止、ニーズの早期発見のための子育て支援の展開、直接支援のできるコミュニティワーカーの必要性と社会福祉協議会への期待が述べられている。

### (3) 社会教育分野における取り組み

本稿では、地域組織化活動のきっかけとなる「子育て講座」に焦点を当てるが、そのうえで、福祉分野だけでなく教育分野で取り組まれてきた子育て支援の流れについても、触れなければならない。それは、文部科学省による子育て支援の始まりが、厚生労働省の少子化対策よりもはるかに早く、1975年に始まった乳幼児期家庭教育推進事業に端を発しているとされているからである。この事業は青少年の非行や校内暴力が問題になったことを契機として、1970年代後半「乳幼児期における家庭教育の重要性と親の学習の必要性を指摘した社会教育審議会の建議に基づいて着手されたもの」<sup>12)</sup>であり、現代も公民館や公共施設、自主的な子育てサークルの企画によって続けられている息の長い事業である。若い新米の親たちが子育ての課題や自分自身の生き方について学ぶことにより、地域住民としての意識形成やつながりを作っていく力を育成するこの取り組みは、子育てのために学習活動から遠ざかるを得なかった主として女性たちのニーズを捉え、1980年代、大都市公民館を中心に保育室の設置や託児付事業が進むなどの広がりを見せた<sup>13)</sup>。講座での共同学習の終

了後、参加者たちをつなぎサークル化（組織化）し、以降の自主的な活動を支援していくプロセスは、社会教育領域ではオーソドックスな手法であり、社会教育主事や公民館主事の間では当たり前のように展開されてきた。公民館における講座は学習テーマに沿った一つの目標をもって組織された集団であるから、組織化は比較的容易であるといえる。

しかし、一方で特に乳幼児を持つ親にとって開催場所に足を運ぶバリアの存在、詰込み型の学校教育を経験した世代にとって「学習」という言葉が醸し出すハードルの高さ、参加に責任や義務が生じることを精神的負担に感じる価値観など、2000年代に入り対象となる親世代の様相も変化し、社会教育領域における子育て支援の取り組みも変化してきている。公民館は地域に存在していることから、福祉領域の「つどいの広場事業」と同様の「子育てサロン」の展開や、地域の「子育てボランティア」養成と同様の「子育てサポーター」「子育てサポーターリーダー」の養成に取り組んでいる。子育て支援における地域組織化活動を展開する場合、これらの教育分野での取り組みとの連携や情報交換などは欠かせない視点となる。

## 3. 東京都国立市子ども家庭支援センターでの実践—「子育て講座」と地域組織化活動

### (1) 国立市における子育て支援の展開

国立市は東京都の西南部に位置し、人口7万5千人弱（平成22年10月現在）、面積8.15km<sup>2</sup>（東西2.3km、南北3.7km）の小さな市である。この町は新宿から電車で約30分のアクセスの良さもあり、企業の社宅、若い世代をターゲットにしたマンションがJR駅周辺を中心に建てられ、高度経済成長期からベッドタウンとして発展してきた。文教都市として整備された町並みの美しさ、坂道が少なく、市内の移動も自転車と比較的容易なことから、子育て世代にも人気の街として上位にランキングされることが多い。しかし、そういった街の人気とは裏腹に、実は本格的に子育て支援施策

に取り掛かったのは、東京都内でも後発組となっている。

国立市は、2003年3月に子育て、子育てについての独自の行政計画として「自分らしく輝いてー国立市子ども総合計画ー」（以下、「子ども総合計画」と略）を策定している。東京都では1995年から子ども家庭支援センターの区市町村への設置を始めたが、国立市では、この「子ども総合計画」の新規重点施策として、2003年度に子ども家庭支援センターの設立が掲げられ、同年8月に実施された。筆者はオープニングスタッフで非常勤の地域活動ワーカーとして配属され、子育て支援の地域組織化活動、つまり子ども家庭支援センターを通じて国立市の総合的な子育て・子育て相談や子育てグループの育成支援やネットワーク化に関する取り組みに6年半携わった。

この「子ども総合計画」は前文に「子どもたちの育ちを、親とともに地域のおとなたち全体で支える仕組みを実現し、安心して子育てができる環境づくりを進めるために計画づくりに着手し、<sup>14)</sup>と計画策定の経緯を述べ、基本理念に①わたらしい育ち②わたらしい子育て③わたしとわたしとのつながり④安全で安心してできる暮らし、の4本柱を挙げている。また理念と併せて、計画の基本方針として①子ども参加の推進②おとなになることを支える③子育てのネットワーク④子どもと子育て家庭を地域全体で支える、の4点を打ち出している。つまり、国立市は子育て・子育て支援において、その中心に地域組織化活動を位置づけて展開する計画を策定したのである。その裏付けとして設置当初から専門職として採用された非常勤職員は全て「地域活動ワーカー」の肩書であり、開設当初3名から6か月後に1名を増員した。地域組織化活動を中心とする者は2名、子どもの発育・発達相談を中心とする者1名、養育・虐待相談を中心とする者1名の計4名で地域における子育て支援活動を展開している。

地域組織化を主担当とする2名のワーカーは学区をベースに市内を東部と西部に分け、各地域でのアウトリーチ事業を担当したり、子育てグループの育成・支援、相談事業、虐待（おそれを含

む）ケースの対応等を行っている。

## （2）国立市における「地域子育て講座」の位置づけ

国立市子ども家庭支援センターは、施設設備の構造上、事務室、相談室、子育てひろば（つどいの広場事業センター型を常設で実施）しかスペースがなく、センター内で「子育て講座」を開催することができず、そのため事業を開催するには、他に場を確保する必要があった。また、子育て支援事業が官民共に各地で展開されていた時期と重なり、行政が子育て支援として行うべき「子育て講座」はどのようなものか、ねらいと内容、手法について、所内での合意形成がなされた。それは、①「地域子育て講座」は孤立しがちな子育て中の親たちのため、地域で情報交換・交流などの活動の場を与え「仲間づくり」を進めることを目的に開催することを明確にすること（募集の際に地域を限定する）②子ども家庭支援センターの子育てひろばを日常利用しにくい地域で、そこにある社会資源（福祉会館や防災センター）を利用して開催すること（アウトリーチ型）③まだ市内での知名度がない中で、広報活動を子育て家庭だけでなく、地域の支援者に向けても行うこと④講座の講師にはできるだけ、市内での活動者を地域資源として活用すること⑤三者を総合的につなぐ働きかけを行いながら組織化を試み、地域の自主グループもしくはつどいの広場的な新しい資源を作ることを目指すことであり、地域活動ワーカーを中心に活動が展開された。

## （3）地域子育て講座の実践事例

次の事例は、センター開設当初2回目に開催した子育て講座「地域子育て講座・東」とその後の展開をワーカーの視点から記録したものである。

### 1) 事業の事前準備

#### a 実施のねらいの設定

すでに別のワーカーが担当で第1回の地域子育て講座を開催しており、募集には定員を遙かに上回る申し込みがあり、出席率も悪くなかった

(70%) が、事後に組織化を試みるためメンバーでの集まりを呼びかけたところ、親子2組・4名しか集まらず、組織化に至らなかった。その反省から参加者たちが個人の参加から仲間づくりまでに至るには、

- ① 親子で気軽に参加できる内容であること
- ② 参加者自身がメンバーと共に過ごしたことから、「楽しかった」と感じられるように配慮すること
- ③ メンバーがお互いに関心を持ち、また集まりたいと思う仕掛けをすること

以上の3点を主眼とし、本講座のねらいを「親子が子どもとの日常で関わり合いながら楽しめる遊び方を学ぶとともに、地域の中で子育てを支え合えるよう関係作りをすすめる機会を提供する」(実施要項)に設定した。

#### b プログラムの検討

国立市ではこれまで保健センター主催で子どもの月齢ごとに参加者を募り「赤ちゃん教室」(内容は栄養・遊び・心理)を開催し、3回の教室終了後参加者に働きかけグループ化を進め、子育てグループを育成してきた。子ども家庭支援センター開設後、それらのグループから出張講座の依頼が度々あった(2003年度8件)。出張講座は、市の職員が依頼のあった市民グループの集まりに出向き、各課の事業説明とその専門性を持って学習活動の支援を行う生涯学習課の事業「わくわく塾くにたち」として展開されており、子ども家庭支援センターが開設前から、市内の子育てグループはこの事業を活用し、自分たちの活動に保健師や図書館職員、児童館職員などを招き、学習会を行っていた。依頼の内容は「子どもとの遊び方を教えて欲しい」というもので、希望内容は「手遊び」7件、「手作りおもちゃ」2件、「リズム体操」「わらべうた」「育児相談」などであった。ニーズ調査の代わりとして、「わくわく塾くにたち」で子育てグループの依頼の多い内容「手遊び・ダンス」「絵本について」「手作りおもちゃ」をプログラムに取り入れ、開催することにした。

#### c 場の設定

JR国立駅に近い東地域は社宅や新築マンションが多く、若い世代が多く住んでいるが、子ども家庭支援センターや学童保育所で開催される子育てひろばには「少し遠くて行きにくい」という声が聞こえていた。開催場所とした「東福祉館」はこれらのアクセスに対するニーズに応える位置にあった。また、この施設は図書館の分室を併設しており、「絵本について」の回では図書室のフロアを使用し、図書館職員のレクチャーを交えることで地域資源の紹介も意図した。

#### d 地域での協力者を依頼

講座を開催し、参加者に仲間づくりを働きかけた場合、地域内での親子同士の関係は作ることができるが、子育て支援の方向性として考えなければならない「子どもと子育て家庭を地域全体で支える」ことへのつながりが弱い。そこで他職員の助言もあり、地域の民生児童委員の方を紹介してもらい、協力を依頼した。民生児童委員は市社会福祉協議会の子育て支援事業への取り組み歴もあり、実際虐待ケースの地域での見守り等で子ども家庭支援センターとは協力関係にある。講座開催のねらいを話したところ、東地域の委員で、講座にご協力いただけるとの回答を得ることができた。

#### e 講師の選定

今回は各回で講師を変えプログラムを展開させたので、今回は3回をとおして同じ講師に依頼することにした。また、プログラムの中で、かなり意図的に「みんなで話す」場面を各回で作らなければ、3回程度では名前を覚えることすらできず「楽しかったね」で終わってしまう懸念があったため、講師にはプログラムを考える際にそのことも考慮してもらわねばならなかった。また3回の間で起こる参加者の変化に併せて各回の内容をデザインすることで「楽しかった」感と同時に参加者たちがメンバーシップと相互作用を感じ取れるよう働きかけたい意図もあった。そこで市の子育て支援事業に関わった経験と保育所での保育士経験を併せもつ講師を選定した。彼女は講座講師は

初体験であったが、ワーカーが考えるねらいについて十分考慮し、プログラムや準備物を考えてくれた。

## 2) 実施内容と参加者について

実施内容は、表1のとおりである。

参加対象は「東地域に住む生後3ヶ月以上の子どもとその保護者」で定員を親子15組としたが、受付の段階で2人の子どもを連れてくる親が3人いたので、会場の広さのこともあり講師と相談し、14組で締め切った。

参加した親は全て母親で、年齢層は20歳前半から30歳後半、2人目を妊娠中の方が3人いた。子どもは10ヶ月から3歳、17名中、11名が1歳半ばであった。

また民生児童委員を中心とする地域参加者が毎回4、5名おり、講座の参加者数は3回でのべ93

名と盛況であった。

## 3) 講座展開の詳細

### <第1回>—仲間づくりへの第一歩

- ・親自身のことについての自己紹介

まずはワーカーが進行し、シートを使い、母親が自分の名前と子どもの名前、ニックネームや好きな色などの他、参加動機について一言ずつ話す自己紹介を30分行った。

- ・「自分の子よりも少し大きい子の遊び方を見てみたい」
- ・「地域の中で親子一緒にお友達を作りたい」
- ・「最近なかなか遊びに連れて行ってあげられなかったの、近くで遊べる場を求めている」
- ・「家でいるときの遊びがマンネリ化しているので、遊びを知りたい」

表1 地域子育て講座・東の実施内容

月 日	テーマ	内容	参加者数
2月3日	みんなで一緒に手遊び・ダンス	アイスブレイク全員で自己紹介(30分) 担当:ワーカー 手遊び・ダンス 担当:講師 自由遊び・情報交換～豆まき アンケート記入	親子13組 (親13名子ども16名) 地域参加者5名
2月10日	絵本、どう読む? どう選ぶ?	アイスブレイク・手遊び 担当:講師 絵本の読み聞かせ、選び方のレクチャー、図書室の利用の仕方 担当:図書館職員 自由遊び・情報交換 前回のアンケートの回答を紹介(20分) 担当:講師 ～参加者主導による手遊び アンケート記入	親子12組 (親12人子ども13名) 地域参加者4名
2月17日	作って遊ぼう、 手作りおもちゃ	アイスブレイク・手遊び 担当:講師 前回のアンケートの回答を紹介(20分) 新聞ぴりぴり遊び・ダンス・手遊び～まとめ 次の集まりに向けてのインフォメーション 担当:ワーカー アンケート記入	親子12組 (親12人子ども14名) 地域参加者4名

・「いろんな人と知り合いになりたくて参加した」

など参加動機が語られた。中にはすでに知り合い同士で「一緒に行かない？と誘われたので来た」という人が3人あった。カーペットの上で車座になって来た順に座ったので、知り合い同士で固まって座っている箇所もあったが、ほとんどが初めての顔合わせで、やはり親子ともに緊張感が見られた。

その後、講師に進行を交代しプログラムに入ったが手遊びやダンスはレジュメなどを渡さず、講師が人形をモデルに行う様を見て参加者たちは、同じように自分の子どもと触れ合いながら何度も繰り返して楽しんでいた。一方、地域参加者たちは、主に2人子どもがいる人のサポートをしながら同じように触れ合いながら、横にいる親とコミュニケーションをとっていた。自由遊びの時間は15分ほどしかなかったが、子どもが動き回るのに合わせて、親たちも移動し、近くに座った親同士あいさつをし、住んでいる場所や簡単な自己紹介など言葉を交わす姿があちこちで見られた。初回は2月3日で節分ということもあり、直前に講師の発案で豆まきを取り入れたのだが、紙を使って豆を作る方法は参加者に好評で、「帰ったらまたやってみよう」という声が数人から聞かれた。最後にその日やった手遊びうたなどのレジュメを渡し、参加感想アンケートを記入してもらい解散した。参加者たちは「2月は寒くあまり公園などに出られないので久しぶりに動き回れたので、子どもも自分も楽しかった」「来週もまた来ます」と口々に帰っていった。

<第2回>—意見をみんなでわかちあう機会を作る

2回目は図書室で「絵本について」の回であったので、メインの講師は図書館職員であったが、まず始まりのアイスブレイクで1回目の講師が前回やった手遊びを主導したところ、レジュメなしにほとんどの参加者が合わせてできた。講師が驚いていると参加者たちは照れ笑いをしながら、顔を見合っていた。

10分程度の導入が終わり、図書館職員が絵本の

読み聞かせを始めると、車座になった参加者は親子で見入っていた。が、15分もすると、1歳児の子どもたちは座っていらなくなり、フロア内で遊び始めた。地域参加者やワーカーが少し離れたところで子どもたちと遊び、できるだけ親たちに絵本の選び方や説明を聞いてもらえるよう配慮したが、3名の親は子どものそばで一緒に遊びながら講師の話は遠巻きに聞いていた。あとから聞いた話であるが、その3名はすでに活動している子育てグループで図書館職員を呼んで絵本の話聞いたことがあるらしく、「読み聞かせは何度やってもとっても良いのだが、レクチャーの内容が前と全く同じだったので、申し訳ないけれど席を離れた」とのことであった。しかし参加者には、熱心に絵本の読み聞かせ方や選び方について質問をしていたり、今回まで「この場所に図書館分室があることを知らなかった」と利用の方法を聞いている人もいた。その後の自由遊びでは、書架に並ぶ本を実際に子どもに読み聞かせたり、持参したおもちゃ等で遊びながら、1回目よりも、参加者同士が子どもの様子など様々な話を交わすようになっていた。

・意見を発表する機会を作る

終わりの20分で再び講師が参加者に声をかけ車座になり、前回の感想アンケートの回答を紹介した。講師は「家で手遊びをやっている」という意見を書いた2人に、家での様子をみんなの前で語るよう促し、「実際みんなと一緒にやってみよう」と提案した。最初彼女は「えー！」と遠慮していたが、同じ参加者から期待の視線が多く、緊張しながらも大きな声で先導し皆で楽しんだ。「今後もこのメンバーで仲良くしたいので、簡単な名簿が欲しい」という参加者の意見に、他のメンバーから反対はなく、地域参加者も含めてお互いの名前、住所、電話番号、メールアドレスなどの名簿を作成することになった（ワーカーが作成を担当）。

次回、最終回なので、最後にやってみたくいこと、参加の感想アンケートを記入して解散となった。

帰りには、建物の前で参加者同士が「また来週ね」と声を掛け合ったり、ベビーカーを押しなが



ら2、3人ずつ同じ方向へ帰っていく姿が見られた。

#### <第3回>-関わりを深める

- ・1つの話題でメンバー同士が話し合い、聞き合うようにまず始めに、前回と同じくまず始まりのアイスブレイクで講師が主導して、手遊びをいくつか行った。

そして前回のアンケートから「普段家でどのような遊びをしているか」について記入したものを講師が紹介し、書いた本人に詳しい方法や遊んでいるときの子どもの様子などを語ってもらった。「うちではこんなふうに小麦粉粘土で遊んでいる」という意見に対して、講師から「他の皆さんはどうかしら？」と問いかけると、「同じようにやってみたが、なぜか怖がってしまった」「作り方を知らなかった」「もう少し大きくなったらやろうと思っている」など参加者からの意見の後、講師からアドバイスがあり、参加者はふむふむ、という様子でよく聞いていた。

- ・関わり合って遊ぶ

今回は手作りおもちゃの回であるが、講師から「身近にあるものを使って、おもちゃにして遊んでみましょう」という提案で、新聞紙を使った折り紙でカブトと風船を親が作り、子どもにかぶせてあげたり、ボール遊びのように子どもとやりとりしながら遊んだ。そのあと新聞紙をびりびりに破いて、紙吹雪のようにまき散らしながら、ひとしきり「破いて散らす」を繰り返した。子どもたちは3回目ともなると、参加しているメンバーにも慣れ、子ども同士で紙切れを掛け合ったり、他の親や地域参加者たちにかけてもらったりしながら、大はしゃぎで会場を動き回っていた。そのあと新聞紙の紙切れをビニール袋に全て詰め、全員が小さめの輪になりビニール袋のボールを曲に合わせて、右から左、左から右へと回し合った。参加者は親子とも笑顔と笑い声が溢れており、最後に初回の手遊びとダンスをおさらいし終了した。講師から参加者へのしめくくりのメッセージの時は、全員がかなりまっすぐに見て話を聞いていたように見えた。

#### 4) 講師のふりかえり

今回の講師は、公立保育所での保育士経験があり、退職後、保健センター主催で子育てひろばを始めたころ(12~13年度)のに関わった人である。しかし前述のように、このような短期講座形式のものを講師として担当するのは初めてであった。彼女は実際講座をワーカーとともに作り上げてみて、以下のような感想を述べた。

「孤独な子育て環境で、同じ子育てをしている仲間を求める気持ちはあるがどう関係を作っていたらいいかわからない、作ることが苦手という現代の若い母親が多くいる。そこで、意図的に子育てをしている者同士が集まる、集まりやすい環境をつくることの大切さを感じた。今回の場合、主催が公的なところという安心感があって地域に一步踏み出すことの後押しができたのではないだろうか。人からどう見られているかという評価が気になる母親たちだけに、『第三者の存在』がある場で関係づくりを進めることは、参加者の負担が少ないのではないかと思った。」

彼女は実際のプログラムづくりには、場の中で参加者の気持ちのリラックスと心の解放をねらいに、リズムに合わせて体を動かしたり、歌ったりすることを多く取り入れた。緊張感を取り除きながら『楽しかったね』という共感関係を少しずつ参加者の中に増やして安心した関係づくりを行うことは有効である。さらに彼女は、同時に第三者のサポートの重要性も指摘している。

今回の講座では、地域の民生委員の積極的な参加を働きかけ、彼女たちが講座の中でともに楽しみながら関係を築いていったことで、親同士の安心できる関係づくりのサポートが展開できたのではないか。講座のプログラムをとおして自分の子ども以外の子どもを知ったり、自分以外の子育てに触れたりしながら、親としての自分を受け入れてもらえる体験が必要である。そのことが親としての自信になるのではないかと感じた。」子どもをとおして親の『社会、地域への参加』を促すことが、地域の活性化にもつながるのではないかと考える。

### 5) 講座以後の展開—グループ活動に向けての働きかけ

#### a 終了時の呼びかけ

3回めの講座終了時に、ワーカーから「今回参加したメンバーでまた来月集まってみませんか？今回の講座ではそれぞれの回にテーマがありプログラムを楽しむことはできましたが、逆にゆっくりお互いがお話する時間はなかなかとれなかったのので、今後できればこのメンバーで、集まる機会を作ってみてはどうでしょうか？」という声をかけた。連絡先の交換の合意はできていたので、参加者たちは皆うなずいており、1ヵ月後に集まるようワーカーが準備した日時と場所を知らせ解散した。しかし前回のこともあり、このときは実際ののくらの人がこの呼びかけに集まってくるのかは、想像しにくかった。

また、地域参加者として3回をとおして参加した民生委員の人たちは、東地域の民生委員の家と電話番号を記した地図を配り、「今回一緒に参加してみて、同じ地域に住む親子のみなさんと知り合えてよかったと感じています。今後近所で出会ったりしたら声を掛け合いたいですね。皆さんからも何か相談事などありましたら、いつでも声をかけてください。」と挨拶した。彼女たち4名は「次回の集まりに、私たちもぜひ参加したいと思っています。」とワーカーにも伝えた。

#### b 事後の集まり・第1回 —話がはずむグループ

事後の集まり第1回（3月16日）には、親子12組（親12名子ども15名）が集まった。プログラムがないので90分の時間をどのように過ごすのかとワーカーは内心不安であったが、集まってみると子どもたちの自由遊びの中で、親同士がコミュニケーションを深めていた。聞くと普段から地域で顔を合わせる機会があったり、名簿配布の効果でお互いが連絡を取り合っ一緒に遊んだり、という交流が1か月の間でかなり進んでいたようだった。

参加者の中で急に転勤が決まり、他県に引っ越すことになった人が今後このような集まりに参加

できなくなったことを報告したり、第2子の出産予定日を2週間後に控えた人が「しばらくお休みするけどまた参加するから待っていてね。」と挨拶したりしていた。後者の人は2人の子を持つ親からいろいろアドバイスを聞いたり、第2子を考えている人たちと出産後、第1子に与える影響の不安などを語り合っていた。たくさん語り合っていたので、会場は90分間声が途切れることなくわいわい賑わっていた。

#### c 事後の集まり・第2回 —リーダー候補の出現

事後の集まり第2回（4月20日）には、親子12組（親13名子ども14名）が集まった。この時、メンバーの一人が新しく知り合った親子を連れてきた。「こうやって話したりする機会が欲しくて参加しました」という彼女をメンバーたちは快く受け入れたが、特に自己紹介をするというふうでもなく、輪に入ったので顔見知りだった人のそばに座り、他の人と交流は見られなかった。子どもたちは場にもお互いにも慣れてきたため、おもちゃと一緒に遊び、親が複数の子どもをサポートしている姿も見られた。地域参加者は熱心に参加者たちに働きかけ、子育てについて相談にのったり、簡単なアドバイスをしたり、会話はとてもはずんでいた。参加者の中で、一番年長の子どもを持つ人が「私は以前他市で住んでいたとき、このような子育てサークルをやっていた。せっかくこうやってそれぞれ仲良くなってきたのだから、みんな楽しく活動していきたいと考えている。これから折りを見て、メンバーに働きかけてみようと思う」とワーカーに語った。

#### 6) 地域参加者たちの行動—自主ひろばの開催へ

今回、講座に参加したことで民生委員の人たちは、若い親子たちとふれあい、語り合う楽しさとサポートできる喜びを改めて感じたと話した。彼女たちは、事後の集まりにも積極的に参加したが、第1回の後、そのうちの2名がセンターを訪れ、今後、今回の参加メンバーを核としながら、地域で月2回程度親子が自由に集えるひろばを開催し

ていきたいと相談があった。「東地域は、社宅があり、転出入が多く、集まれる場を求めている若い親子がたくさんいる。すでにできあがった母親同士の集まりに一人で参加するのは、なかなか勇気のいることだし、誰かがなじめるようなお手伝いをするには必要だと思う。自分たちがお世話係となって地域の中で、気軽に集まれる場を、今回開催した東福祉館でやっていきたいと考えている。この趣旨を何人かに話したところ、全員で7名の協力者が見つかった。運営について相談にのってもらいたい。」とのことであった。ワーカーは保険の用意や広報、その他準備の関係で、何度か相談に乗り、その結果5月から地域のサポーターによる子育てひろば「東のポッポひろば」がスタートした<sup>15)</sup>。

#### (4) この実践事例の課題と問題点

##### 1) 地域子育て講座の展開における課題

###### a ニーズ把握—親たちは話す場を求めている

語られた参加動機や毎回のアンケートの回答には「友達を作りたい」「他の人がどうしているか知りたい」「お母さん同士話したい」という意見が寄せられていた。今回の講座では、意図的に「話す場面」を講座の中で設けようとしたが、実際子どもがいながらじっくりと話すことは難しい。親たち自身が「友達を作ること」「話すこと」を求めている。少しでもそのニーズを充足する機会としてこの講座は有効であるが、母だけで話す機会の見当も必要である。

###### b プログラムの構成—講座は、話す関係のペースづくり

講師がふりかえりで語るように、3回の講座の間に参加者の緊張感を徐々にほぐしていったことは、関係づくりを行う上で、大きな意味を持っている。自己紹介を行うだけで、「人前で自分のことを話すことは久しぶりでドキドキした」人が、10人以上の中で意見を発するようになるのには時間がかかる。3回で培った「場に参加することの安心感」が事後の集まりへの参加を促したのではないだろうか。そのためにも、プログラムには楽

しさを、気軽さ、新しい発見の3つの要素を取り入れることが重要である。

###### c 子育てグループを扱う注意点—子どもは親が関係を作る媒介者

親子グループに関わる場合、子どもがいるから話せないという反面、大人同士だけならば話すきっかけがつかみにくくても、子ども同士が関わり合いながら遊んだり子どもが存在することにより、接点ができ会話を交わすことができたという一面もある。地域参加者たちは50歳以上で親の参加者たちとは世代が離れているので、彼女たちにとっても話すきっかけになっていた。

乳幼児の子育て期はサイクルが短かく、参加者の入れ変わりが激しい。その中でどのように地域の中での関係づくりを進めるかは地域組織化を進めるうえで、大きな課題となる。

###### d グループ育成の期間—時間と援助のスキルの必要性

センターの利用者から、子育てしながらのグループ活動は、「負担が大きい」という意見をよく聞く。子育てグループでは、リーダーに負担がかからないよう持ち回りで各回の担当を決めることも可能であるが、逆にリーダーがあいまいになりまとまることもできず、復職や第2子誕生などでそれぞれ忙しさを理由に自然消滅的に崩壊していくグループが多数ある。親同士、お互いの評価を気にしたり、なかなか関係を作りにくい世代であるし、子育てグループの活動は毎週行われるものは少なく、月に多くて2回、もしくは月1回のペースで集まることがほとんどである。その中でリーダーシップ、メンバーシップを育てるためには、半年程度の時間を要すると思われる。そこにはメンバーを援助するソーシャルワークのスキルが必要であるし、さらには地域の「第三者」の存在も子育てグループが自主的な活動を展開していく力をつけるのに、大きな意味を持つと考えられる。

## 2) 地域活動ワーカーに求められるソーシャルワークのスキル

この事例は一見、「子育て講座」から「地域組織化」に向けて成功した事例のように見える。しかし、事後の集まりの中でワーカーは、自主グループとして活動しようとする母親たちの動きと、地域支援者による資源づくりの提案の2つに迷うことになった。そうなった一因に、この講座に参加してはみたものの違和感を覚えていた参加者の存在がある。ワーカーがこの参加者と関わった記録を以下のように残している。

### ＜グループになじめないまま参加したAさんの観察記録＞

Aさんは20歳代の若い母親で10ヶ月の子どもがいる東地域の市民であり、講座開催前から子ども家庭支援センターの子育てひろばに度々訪れていた。子どもが6ヶ月ぐらいの時からセンターを訪れるようになったAさんは当初「友達が欲しい」と来所していたが、たまたま他の親子のいる時間とは合致せず、ワーカーと話すことが多かった。彼女は他のワーカーからもなんとなく気になる存在で、何度か話すうち、「学童の子育てひろばに行ってみただけ、大きい子ばかりで行きづらくて1回行ったきり」であるとわかった。

そのうちセンターで2、3人の親と知り合いになりともに時間を過ごすこともあったが、今回東地域で講座を開催するにあたりワーカーから「地域でお友達ができるかもしれないし、参加してみない？」と声をかけた。

1回目の時、彼女はどの参加者よりも早く会場に入り参加したのだが、自分の子どものそばから全く離れず、他の親子たちともあまりやりとりをしていなかったことが気になっていた。2回目までの間にセンターに来所したので参加した感想を聞くと、彼女ははっきりと「居心地が悪かった」とワーカーに告げ、「なぜそういうふう感じたのか」という問いには、「子どもと同じぐらいの月齢の子がいなくて、他のお母さんたちとも話づらかった」と答えた。彼女が求める同じ月齢の子どもを持つ親は参加者の中にいたのだが、座った

場所がずいぶん離れていた。1回目のプログラムは親子で関わり合う手遊びが中心だったため参加者が動き回るようなものではなく、それぞれ最初に座った位置から動くことは少なかったことに気付いた。そこで彼女には「同じぐらいの月齢の子は参加しているので、次回近くに座れるよう配慮するし、そこで話してみてもどう？」と働きかけた。彼女はうなづいて「次回も参加する」と言った。

2回目の時も、Aさんは一番にやってきて最初会場の奥の方に座ったが、同じ月齢の子を持つBさんがやってきたとき、Aさんをさりげなく呼び寄せ「同じくらいだね」と話しかけ近くに座れるようにした。それをきっかけに二人は少しずつ話すようになり、一緒に講座に参加していた。Aさんは3回目までの間にまたセンターに来所したので、再び感想を聞くと「ちょっと楽しかった」と答えた。理由はやはり同じぐらいの月齢の子どもを持つBさん、Cさんと話すことができたからだという。そのときAさんは「3回目も参加する」と言ったので「今度も近くで一緒に参加するといいいね」と答えた。

3回目の時もAさんはやはり一番にやってきた。3回目はみんな入り乱れて遊んだので、Bさん、Cさんも初めは一緒に遊んでいたが、そのうち座る位置はばらばらになっていった。Aさんも子どもの動きのままに付いて動いていたが、子どもがぐすりだしたこともあり、少し輪から離れた感じになっていた。

その後2週間ほどしてからAさんに全体の感想を聞いたところ、「同じ月齢の子どもを持つお母さんたちと知り合いになれたことはよかった。電話をかけたり、メールをしたりやりとりが始めてよかった。しかし、あの場に集まったメンバーのグループとしてはやはり居心地はよくなかった。」との答が帰ってきた。「私としてはなぜだかセンターのひろばが一番居心地がいいんです。」というので理由を聞くと「適当に放っておいてくれて、強制されないかんじがちょうどいい」とAさんは答えた。

### ＜ワーカーの所感＞

Aさんはワーカー自身が誘ったこともあり、特に注意して観察していたメンバーである。彼女はアンケートに毎回「楽しかったです」と書くのだが、参加の様子や表情からどうもそのとおりだとは思えなかった。ちょうどセンターに来所していたこともあり、そこで本当の感想を聞き取ることができ彼女も率直に答えてくれたのは幸いであった。

このときのインタビューでは、最初彼女は「同じ月齢の子ども」にこだわっているようだった。そこで後日同じ月齢の子どもが集まる子育てサークルの紹介もしてみたが、参加には至っていない。彼女の求める「友達が欲しい」という友達は、今のところなんとなくつながれる友達なのだろうか。彼女が「適当に放っておいてくれて、強制されなにかんじがちょうどいい」というように、グループには所属したくない意志があるのかもしれないとこの時ワーカーは推測した。後日Aさんに「講座に参加したメンバーとやりとりはあるか？」との問いに「近くだから遊んだり連絡を取り合っている」と笑顔で返答があった。Aさん自身が楽しくないのに、講座時毎回一番にやってきたことにワーカーは彼女自身の責任感の強さのようなものを感じていた。そして、彼女のその責任感の強さが逆にグループ参加を阻んでいるのかもしれないとも感じた。しかし、Aさんは講座後の集まりにも参加していた。「仲間が欲しい」という気持ちもまた彼女の中には存在していたはずである。

ワーカーはAさんとのやりとりで、グループ化することとつどいの広場を作ることで地域の子育て家庭の居場所を提供することの意義について、求められている「関係づくり」の深さはどの程度なのかについて迷うことになった。結局、地域支援者の資源づくりの支援を中心に行い、その結果母親たちの地域グループづくりには積極的に関わらず、実現にいたらなかった。この実践は、子育て支援における地域組織化を考えると、個別のニーズ（親と子のそれぞれのニーズ）とグループのニーズ、地域のニーズのとらえ方、地域組織化の目的をどう扱うかという点において、ワーカー自身の力量が問われる事例といえる。

### （5）その後の国立市における地域組織化活動の展開

国立市子ども家庭支援センターでは、開設初年度の実践をもとに試行錯誤をしながら、現在も地域子育て講座を軸に地域組織化活動を展開している。7年間で市内の開催場所は7地域と広がり、一定の認知も得ている（表2）。そのうち1地域を除いて、講座参加者を中心とした地域の自主グループが成立して、地域の新しい子育て支援の資源となっている。これら地域グループに地域支援者が入って活動しているのは2地域であるが、もしくは地域の社会資源である福祉会館や防災センターを場所として利用しているの、施設の管理人の方たちが見守り者として存在してくれている。

実際、国立市における講座参加者による自主グループの成立とその後の活動の展開への支援は、ソーシャルワークの手法というよりも本稿2（3）で述べたような社会教育的手法によるところが大きい。それは、国立市は社会教育分野において先駆的な取り組みを展開してきた市であり、前述した国立市の「子ども総合計画」も、策定主管課が福祉部ではなく教育委員会生涯学習課であり、初代センター長、2代目センター長が社会教育主事ではないがいずれも前職が生涯学習課であったことも影響している。地域活動ワーカーは1名が保育士かつ社会福祉士、1名が教員かつ社会教育系のワーカー経験者であった。また市の面積が小さいゆえに地域組織化活動に取り組みやすいということもあった。地域活動ワーカーは、講座参加者である親子やグループの支援はもちろんのこと、講座を開催する場である地域住民に子育て支援への理解を得るための取り組みも行った。さらに、地域だけでなく保健センターと協働して同じ月齢の子どもを持つ母親グループの育成、そのグループのネットワーク化、子育てボランティアの育成、育児不安の早期解消を目的とした講座の開催、民間や教育分野を含む子育て支援団体との情報交換など子ども家庭支援センター自体の他機関との関係づくりを含め、まさにコミュニティワーカーとしての動きを実践し、地域組織化活動を積極的に展開している。

表2 国立市子ども家庭支援センターにおける地域組織化活動

地域子育て講座の展開（参加に住所地を限定）

	開催地域	回数	のべ参加者数	内容
2003年度 (H15年度)	2地域	6回	134名	わらべ歌、手作りおもちゃ、子育て相談、手遊び、ダンス、絵本の読み聞かせ
2004年度 (H16年度)	4地域	11回	107名	わらべ歌、手作りおもちゃ、子育ての話、手遊び、絵本の読み聞かせ
2005年度 (H17年度)	5地域	15回	321名	手遊び、おもちゃづくり、お絵かき、ベビーマッサージ、子どものことQ&A、お絵かき、工作、紙芝居
2006年度 (H18年度)	7地域	16回	356名	手遊び、おもちゃづくり
2007年度 (H19年度)	5地域	13回	299名	手遊び、おもちゃづくり
2008年度 (H20年度)	6地域	18回	308名	手遊び、おもちゃづくり
2009年度 (H21年度)	7地域	19回	382名	手遊び、おもちゃづくり

全市対象（地域限定なし）の子育て講座

	回数	のべ参加者数	内容
2003年度 (H15年度)	1回	40名	虐待シンポジウム
2004年度 (H16年度)	3回	86名	親子ダンス
2005年度 (H17年度)	3回	60名	親子ダンス
2006年度 (H18年度)	4回	64名	親子ダンス、育児の不安を語りましょう（託児付）
2007年度 (H19年度)	7回	118名	親子ダンス、子育てのあれこれ、語りませんか（託児付）
2008年度 (H20年度)	6回	110名	子育ての話、しませんか（託児付）
2009年度 (H21年度)	3回	25名	子育ての話、しませんか（託児付）

「国立市事務報告書」平成15年～平成21年度より筆者作成

#### 4. 結論

##### (1) 地域組織化活動における「子育て講座」の意義

社会環境の変化や家族形態の多様化とともに、子育て環境は劇的に変化している。1990年の1.57ショックを契機に少子化が社会の深刻な問題として取り扱われるようになって20年が過ぎた。この間、わが国では法改正や様々な施策を展開し、急

速に進む少子化の歯止めを試みたが、ようやく近年になって、合計特殊出生率は横ばい状態を維持しつつある。充足されたとは言いきれないが、保育サービスの充実や経済的負担の軽減に関する施策が功を奏したともいえる結果であるが、2009年の合計特殊出生率は1.37<sup>16)</sup>であり、少子化対策の契機となった1.57にはまだまだ及ばない低水準での推移である。

「子育て講座」は、前述の『ガイドライン』に

例示される地域組織化活動内容の中で、①地域の啓発活動、として挙げられているが、③地域グループの組織化への支援にもつながるし、④ボランティアの養成・支援・活用⑤その他地域の子育て活動への関与にもつながる。積極的な開催が期待されるが、そのねらいを明らかにして取り組まなければ、数回の楽しい時間を過ごす機会に留まってしまう。事例に挙げた国立市では、2004年度から地域子育て講座を「親子で遊んで仲間づくり」という講座名に変え、その目的を参加者にも明示している。プログラムも手遊びやおもちゃづくりは30分のみとし、その分母親同士の自己紹介や自由に語り合う時間を多くとるように転換している。このように、育児講座などを企画する場合、関係づくりをねらいにしていること、つまり講座の意義を参加者、講師、地域支援者、ワーカーで共有することが必要である。そして、それが次のアクションである地域組織化活動につながるのである。

また、アクセスの問題で特に子どもが乳幼児期に地域で孤立化し、育児不安を一人で抱えている母親は少なくなく、アウトリーチは子育て支援にもっと取り入れられるべき手法である<sup>16)</sup>と考える。さらには、対象である子育て中の親に「近くだから行ってみようか」と思わせる仕掛けが、子育て支援における地域組織化活動を成功させる鍵になる。しかし、講座スタイルは好む者とそうでない者に分かれるし、施設の広さによって安全確保の点から参加人数を限定しなければならない。つまり、つながりを必要と自覚している人にすら確実に届く方法ではない。真のアウトリーチを考える場合、2009年から法定化された保健師、助産師等による「乳児家庭全戸訪問事業」は、子育て家庭のニーズ把握に大きな役割を果たす。この事業と地域組織化活動の連携は不可欠であり、孤立気味の母親には優先的に参加してもらうことも必要な配慮であるかもしれない。

## (2) 地域活動ワーカーの役割

地域における子育て支援は、全ての子どもと親を対象にする。支援が必要な人もそうでない人も

すべて含まれる中で、担当するワーカーが地域組織化活動を効果的に展開していくには、専門職のスキルが必要である。コミュニティワークはもちろんのこと、グループワークのスキル、問題を抱えている人を発見する見極めの力も同時に求められる。

事例に挙げた記録を作成したワーカー筆者自身は、当時ソーシャルワークを体系的には学んでおらず、社会教育の中で培ったグループワークの手法を用いて地域組織化を試みた。それはそれで一定の効果を挙げたので、社会教育専門職が持つ地域活動ワーカー的なスキルも今後注目して取り扱いたいテーマではある。しかし、福祉現場で多くの子育て中の親と接する過程で重要であると認識するに至ったことは関係づくりをコーディネートするためには、対象理解、個別ニーズ（親と子のそれぞれのニーズ）とグループのニーズ、地域ニーズの把握とそれらの関係性を明確にし、包括的な支援の方法を確立するということである。事例からは、講座の企画・運営におけるワーカーの細やかな配慮と意図的な働きかけが伺える。参加者同士の関係づくりのための意図的な働きかけをグループの成長段階に合わせて行うスキルがそこには存在するのである。

地域子育て支援拠点事業では、その役割を今後保育士に求める傾向にある。子育て支援事業において地域組織化活動を効果的に展開するには、子ども家庭支援センターのような地域子育て支援センター機能をもつ機関だけでなく、保育園でも同様のスキルが必要とされる。しかし園内で保育に携わりながら隠れた地域ニーズの把握や働きかけを行うことは、かなりの負担を要することも事実である。地域活動ワーカーの役割を考える場合、地域組織化活動を展開する機関には、常に地域へ働きかけ、関係づくりを支援できる専門職の配置が必要であると考えられる。

## 注

- 1) 現在わが国の子育て支援施策は「子ども・子育てビジョン」（平成22年1月29日閣議決

- 定)をもとに展開されている。この施策は、社会全体で子育てを支えるとともに、「生活と仕事と子育ての調和」を目指しながら、次代を担う子どもたちが健やかにたくましく育ち、子どもの笑顔があふれる社会のために、子どもと子育てを全力で応援することを目的に策定された。
- 2) 平野幸子 (2008). 「子育て支援領域における『地域組織化活動』について—先行研究の解題と一考察—」, 明治学院大学社会学部付属研究所 研究所年報38, 34頁
  - 3) 「つどいの広場」事業は、概ね3歳未満の乳幼児とその親が気軽に集まり、相談、情報交換、交流ができる場として、2002年度から全国で設置が進められている。
  - 4) 東京都福祉保健局 少子社会対策計画課 (2005). 「子ども家庭支援センターガイドライン」, 4頁-5頁
  - 5) 東京都. 前掲書, 86頁 ここでは地域組織化活動を①地域の啓発～活動住民の関心・理解を深め、意識を高めるための広報活動、育児講座等の啓発活動、地域との交流等②地域の福祉ニーズの調査研究～活動の分析、事例研究、アンケート調査、新たなサービス開発等③地域グループの組織化への支援～子育てグループの育成、活動場所の提供、グループの育成・助言・指導、情報提供等④ボランティアの養成・支援・活用⑤その他地域の子育て活動への関与～共同活動・行事への企画参加、助言・指導等としている。
  - 6) 山野紀子 (2002). 「『子育て支援』における地域組織化活動の展開とその分析—ネットワーク形成過程と地域型援助職の役割—」, PL学園女子短期大学紀要第28号
  - 7) 平野. 前掲書
  - 8) 平野. 前掲書, 44頁
  - 9) 研究成果として、松原康雄、妻鹿ふみ子、秋貞由美子ら (2009). 「子ども家庭支援センターにおける地域組織化活動について」明治学院大学社会学部付属研究所 研究所年報39がまとめられている。
  - 10) 社会福祉法人全国社会福祉協議会 (2010) 『市区町村社協における虐待予防のための地域子育て支援の展開 要保護児童対策地域協議会と地域子育て支援に関する委員会 報告書』
  - 11) 加藤曜子 (2010). 「虐待予防における地域子育て支援の意義と目的」, 前掲書 5頁
  - 12) 小木美代子 (2004). 「“子育て・子育て支援”取り組みのながれ 自主的子育てサークルの動きと政策動向に視点をあてて」, 『月刊社会教育』, No.581, 5頁-6頁
  - 13) これらの活動は、学習者である母親、保育に携わった保育者、講座をコーディネートした公民館職員の記録として、国立市公民館保育室運営会議編 (1979). 「子どもをあずける：子どもを育てながら自分を育てるために」, 未来社や国立市公民館保育室運営会議編 (1985) 「子どもを育て自分を育てる：国立市公民館「保育室だより」の実践」, 未来社などが出版されている。
  - 14) 国立市教育委員会生涯学習課 (2003). 「自分らしく輝いて—国立市子ども総合計画—」, 5頁-6頁
  - 15) 「東のポッポひろば」は現在も運営されており、今年で6年目となった。地域支援者には民生委員以外の地域住民も参加し、交代でひろば当番のスケジュールを組み、月1回のスタッフミーティングで時折プログラムを展開し、地域の子育て支援の資源として貴重な存在となっている。子ども家庭支援センターには時々PRや助言を求めてスタッフがやってきたり、また、地域活動ワーカーが訪れて支援を行うなどの関係にある。
  - 16) 厚生労働省, 2009年人口動態統計月報年計
  - 17) 国立女性教育会館 (2008). 「家庭教育・次世代育成支援のためのプログラムに関する調査研究『子育て支援におけるアウトリーチの取り組み—地域の人材を活かして支援を届けるしくみづくり—』」報告書, 5頁-8頁